

紅葉

持山の柴木もみちて見頃かな

照葉

掃苔になつかしみ見る照葉かな

銀杏

草子讀む夜うなるはいてふまきちらし

萩黄葉

叔父の小園にて

晝の日鬱と黄葉キバなす萩の大しだれ

水蜜桃

若き人々歌話に更け水蜜桃匂ふ

蜜柑

みかん山高嶺構へて日こそ澄め

日の光り木々にあまねくみかんかな

上野村よりの歸るさ知れ

る童女の墓に立寄りて

山づとのみかん一枝さしもどり

葡萄

錫の舟これへ盛りたまへ葡萄守

茶 黄

椎の實

榧の實

枳 棋

菩提子

茶黄かざし賑やかにもどり麓晝

舜哇子再度山の戻りを店に立寄られて

さらくどくる、椎の實よ山おもはしむ

榧の實をあぶり更けたる禪話かな

榧の實や居士がひねりし小土器

木の葉きく窓に呉る、や枳クンボ根ナシ

再度山をもどりし舜哇子より

短日の晝にもらひぬけんぼなし

菩提子を母が袱紗に御菩提所

草珊瑚

晩秋訪棗院

梅 嫌

栗

南 瓜

零餘子

枝 豆

せんりやうに帯いそぐや鉢の數
寺中なる庵訪ひしぐれ梅もどき

栗刈るやと離別れるて女の縣戀ふ

野に居りて思婦と培ふ南瓜かな

廬の夜食兀たる南瓜たふとけれ

蔓引てむかごこぼる、音をきく

捨干に枝豆の木の四五把かな

紫蘇の實

草庵

葉生姜

紫蘇の實を暮れて煮つめて一夜の香
てうちんしめす馬に葉生姜朝嵐

桔梗の實

大方は淺茅にちりぬ桔梗の實

おしろいの實

日の小さびしさおしろいの實のつまみよげ

朝顔の實

朝顔はせる筒袖羽織子は着たり

鬼灯

鬼灯ならし思ひ出てふと涙ぐみ

瓢

月のあかき夜にぬすまるゝふくべかな

孟蘭盆會

僧あふぐ心づかひや盆の宿

魂祭

いづ方へ黄なる僧衣や魂祭

墓参

墓まゐり坂にかゝりて俤とむ

御陵を拜みてとほる墓まゐり

裏山につくくぼふし墓まゐり

逆の峯入

峯入の晝餉や坊の白木椽

去來忌

去來忌や少々芳醇をあたゝむる

子規忌

母堂舊廬におはす尊とき子規忌かな
偉イなる糸瓜を懐ふ忌日かな
氣冷やかに日苦うして子規を追懐す

後の敷入

やぶ入や涼しくたどる塔の下

障子貼る

歌會の日近う障子はられけり

登高

高きに登れば我庭に思婦の玉の如く

柚餅子

弟子僧と分ち味はふ柚べしかな

案山子

鳥の眼に大ききうつる案山子かな

引板

我レ立て、案山子凄きや夕山田
閑遊や北白川の引板の音

焼帛

焼帛や山里かくもたよりなき

小鳥網

道ほそく歸寺の僧あり小鳥網

薬堀

武庫山の採薬翁に訪はれて
薬堀を客とし語る朝日かな

秋雜

山に入る孤客小さし軒の秋

冬

初冬

初冬や鳥居きはより柚の道

時雨月

上野村山園

境澄みみかん青きやしぐれ月

凍

凍てきしむ樹をきく障子たてきりて

十二月

詩の債妻も口酸う十二月

春待

女来て一廬掃除や春をまつ

冬の雲

石切に雨をこぼすや冬の雲

冬の雨

冬の雨此寒山の栢に降る

氷

夜半の木に雨風氷る浦曲かな

雪

雪の樵つらなりて森を出づるかな

寒

縁子をふくくどくるみ夜はや寐ねん雪

霰

霰れぬと答へつ風呂の柴さしが

霰

霰やみふくら雀に日の出かな

水酒

水酒に花屋内井戸ゆたかなれ

冬溪

冬溪フユノタニや石にひゞきて關伽を汲む

鷓鴣

廬に入る時庇に居りしみそさしい

ひつそりと雪の御階やみそさしい

水鳥

水鳥や濠はとりまわす山屋敷

水鳥や木を樵るはなき日なき

水鳥や馬も寐入りし陣のさま

冬の獸

大木のかくさぬ冬の獸かな

鱒

鱒濱に鮮らけき見る暮雪かな

冬の蜂

園を涉れば寒蜂の占むる花孤ッ

冬の蠅

冬の蠅夜は燈蓋にあたゝまる

返り花

ふかう拜みし古寺閑なるにかへり花

山茶花

山茶花に菊水の暮や吉野宮

山茶花や里一乗寺竹壓す

曇りともなく日淡く山茶花こぼるゝ

さいんかの干ぬほどに雲のほどけをり

上野村にて

山茶花や北かこふ嶺ネの片明り

散紅葉

綿急ぐ僧の白衣やちり紅葉
柞ちるや旅人入るゝ垣の内

枯木

箕白が臺灣に去る時

落葉

鉢の枯木のうすくらくさびしく別れ
古き津に舟五つ六つ落葉かな
水さびし落葉に魚の掬はるゝ

寒菊

寒菊に小さき村の祭事かな

冬牡丹

寒菊の鉢おく古き鉢ふせて
土ふかきむろにふくるゝ牡丹かな

枯菊

菊かるゝ樵の家にとまりけり

籠りゐる家のさまにて菊かるゝ

蕪

寒郊水畔

丸ぼちやのくつきり白き蕪かな

御命講 水鳥にひやく太鼓や御命講
 戎講 紺の香のつよきのれんや戎講
 吹草祭 青かりしふいご祭のみかんな
 御佛事 御佛事の茶を焙じます庵主かな
 荷前使 荷前とて寂びにし里を使かな
 御佛名 おろくと女儀のむせびや御佛名

炭 あるじしばらく炭つぎて言ふ事もなく
 炭竈に間近き法の庵かな
 埋火や藪を見に来て語る人
 萩柴のうすきけむりや庵の内
 巨燧 嵐ふく日家内ひつそりと巨燧の間
 焚火 坂の上に日の出るころの焚火かな
 北窓塞ぐ 北ふさぐ宿しんみりと旅寐かな
 綿子 北ふさぎ雀のすがる蔦もなし
 一家内綿子着そろひ日南かな

口切

髪置

口切や寂びきりし野を見てまゐる
稻かけて子の髪置の祝ひかな
たらちねも髪置の日の晴着かな

寒行

寒行僧大どかに夜深貝吹かれ
女より／＼誓文拂噂させり

誓文拂

終挿

鬼の子の終のぞく暮間かな
夜人いくたり厄塚のもとにつゝましく

厄塚立る

餅搗

乾鮭

年忘

年用意

羽子板市

のし餅に粟のまじりてひろげられ
乾鮭に應接にぶき幽居かな
うまく二人を落しやる夜の年忘
古庭に白のすわりや年用意
僧あきうど峯に落合ふ年用意
羽子板に下り居の母と夜戸出かな

詩を祭る

詩を祭る寒燈春に移りつゝ、

除夜

共に祭る老妻の歌反古かな

除夜の鐘つきをはりけり寒山寺

歳暮雜

神杉に夜ふかき年の境かな

閑庭にまぎるゝ年の雀かな

荷鞍ふみてもぐ橙や年の宿

楳や寂光院の年の畑

俳塵後集

新年

初日

ひゞきるる道のべの水に初日かな

御降

初日影まばゆくなりて庵り出る

鏡餅

御降や舟を休めし濱砂子

手鞠

閨敷きて灯をおく蔭のかゝみ餅

手まり

手まりかゝる母にそひゐて雪ふる日

手まり唄しばらくはあり窓の下

春

時
候

二 月
春 曉
春 の 朝

蓬 野 を ゆ き し 二 月 の 末 つ か た
春 曉 の 雨 さ や く と 降 り ゐ た り
ふ と ぬ け し 籠 鳥 か 春 の 朝 の 木 に

小 亭

春 の 朝 の 雑 巾 に つ く 棕 の 花

長閑

麗

遅日

野の家の留守を見通す長閑なり
住みつきて遠くも行かず長閑なり
湖のへりを水のながるゝうらゝかさ
住む女はらからにしてうらゝなり

茜見せつ暮れかねて雨の絲はあり
下りて來つ遅き日のさす階子の間
花の粉が胸肘につき暮おそき

小亭に客多くありける日

春の暮

春の夜

暮春

春のくれ高みの町の門すぐる
ほうくと風ふき出で、春の暮

水驛子に對して

春夜訪はれいくつ畫帖の紐をどく

高き木を風のなびかし春くる、
鳥の親を見るに勞れつ春くる、

小亭

水壺に苔ののぼりし暮の春

天文

春の風

春風や花剪りてもつむろの口

春の日

水べりにゐて春風のさむさかな

霞

苔のつく折戸に春の日影かな

春の雲

刈柴をもたらす御所の垣かすむ

春の雲

楠のたつ門ひろかりし春の雲

春の雨

ねむたき夜雫きこゆる春の雨

朧

あかるうに晝間たちゆく春の雨
杉垣の内をしめりの朧にて

春の月

枇杷の花のあとつぶらなり春の月
春の月杜氏の柳さし木つく

市陌

柳のはしによき書見出でし春の月

地理

春の山

春の山花ちりてよりのぼりけり

春の水

春の山猫逐ふ屋根のはづれかな

春の水

春水や舟の匠の住みどころ

水温む

鳥をきく道のこまかく水ぬるむ

春の川

傘かざし春の河原に立ちゐたり

春の野

大根を鼠のあらす春野かな

春の海

春入江舟に晝餉のどよきけり

動物

猫の戀

猫のこひ社の中に畑ありて
猫の戀草のうるほふ夕ぐれに

鶯

飼はれるてなく鶯を山かげに
蒼みたる松のつゞきてひばりかな

雲雀

燕

青空に煙直なりつばめくる
朝餉にて外の見えをり燕くる
燕出入り江のほそくと見ゆる宿

雉子

雉子なく家の四方なる野のひろみ

雀の子

墓の草に啼ける雀の子をひろふ

囀

同じ路を遅れてつくに囀れり

春の鳥

草川に啼入る春の小鳥かな
囀りやうこんのれんのかゝりゐて

鳥交む

鳥つるむ山に手入れて住みかゝり

鳥の巢

鳥の巢の下のほそ道浪かよふ

巢立鳥

山の家山の青みに巢鳥たつ

鳥歸る

人中にまじりて啼ける巢立鳥
遠き空を日はくもれども鳥かへる

鳥入雲

鳥雲に松を仕立つる人の聲

雁歸る

礎墓の塵焼くを雁立ちにけり

春の雁留守居僧出て追ひにける

白魚

柳籠

蜩

田螺

蝶

白魚舟雪の小雨にかはりつゝ
 しら魚や松葉もやせし雪のあと
 雨のあとの野のしづかなる柳籠
 蜩うり午のくもりの町ふかく
 すて垣に水のながれて田螺かな
 そよ風に野のかわきゆく胡蝶かな
 蝶かけり町さわくくと西日なり
 うす墨のくもりの底のしゝみ蝶

蜂

病後にて日に親しむに蜂すぐる
 蜂さまよひ曇りの庭の花淡く
 八時の花に蜂ゐて幽かなり

虻

蟻出る

蛙

蠶

山虻のこもり葉曇りきりにけり
 蟻出でゝのぼりみしなり桐の苗
 柴積むに雨のそぼちつ啼蛙
 はぐれ雲ふと啼出す蛙かな
 ふるさとの花白かりし蠶飼かな

植 物

梅

梅の中野川夕日にながれけり

郊行

木の芽

雨濃くなりぐんぐんとありく梅林
道あらたに木の芽の匂ひつゞくるに
水音を知りて夜つたふ木の芽垣

柳

柳の芽間をおきて一人二人ゆく
我肩に柳のたるゝ日くれかな
柳鼻々いつまでもこゝに居りたけれ

峰青嵐翁還曆賀

齡長きまゝに柳のたれにけり

黄瑞香

祖父の舊棲を懐ふ

椿

黄玉濃くなる一木みつまた楽しまれ
家の内の晝つめたうに椿さす

桃

晝までに町をもどりし桃の花
桃の奥青う小山のすわりゐて

上巳

妻午より店に来てゐつ桃の花

上野村の山守より

ふた色の桃を添へたるわけぎかな

李の花

義妹の嫁ぐさいふに

梨の花

棋櫃の花

山査子の花

木瓜

海棠

櫻桃の花

肩あげの眼にあるにはや李さく
夕日はなれ砂風すこしたち梨の花
くわりん咲くさびしきやうに春を住み
春小旅垣さんざしにそひゐたり
木瓜の花日はかぎりなくあかきかな
鞠つくを海棠かざす御階かな
入りてまた傘もちて出づ花ゆすら

櫻

夫婦にて借りそめし家の若ざくら
すぐそこに山の青みし遅櫻
薄藪に花のうつろふ町家かな
大しだれの花にやすらふ里ふかく

木蓮花

木蓮花風のどやろく寺の内

石楠花

石楠花をふかう見し山べ御菩提所

連翹

連翹や野風ふくらむへりを來て

山吹

山吹を折りてぬれたる草におく

松の花

夕眺めしてさす門の松の花

躑躅

枝ひろう見すかすうこんつゝじかな

藤

瓦おく堀にながるゝ藤の花

田へ水をひやかせをりし家の藤

野の家の野より暮るゝに藤をみる

藤のころ瀧の水ひく町に住み

留守もりの子にはなれけり藤の花

しら藤のかゝれる深山ぐもりかな

草 萌

芝萌ゆる岡を下らず小半日
髪つみてそこからあそぶ草もゆる
夕餉して出て見てさむく草もゆる

蘆の角

日をおきて見し野あかるく芦の角

草若葉

草若葉雨ふりぬべき日くれなり

春の草

水上に雪ののこりて春の草

露の臺

ふきのとう山路のうすき埃かな

紫 萑

町の原つとめ人行くはこべつむ

春 蘭

春蘭をほりおこしけり寺の下

綬 草

小亭春日

もぢずりの穂を出してゐる鉢ふるく

通草の花

山ありき花あけびなど折りにけり

蒲公英

たんぽゝやたゞ一ぼんの村の道

菫

あけぼの、風のさゝやくすみれぐさ

蔭多き木の間の道のすみれかな

櫻 草

さくら草の日影濃くなるばかりにて

菜の花

大根の花

豆の花

獨活

炭

春菊

三月大根

三四本菜の花さして人をまつ
 ふきぶりのあと夕日にて花大根
 旅をする夜のしらくの豆の花
 豆の花ひぢがさ雨にぬるゝなり
 薄月の雨夜の底の芽うごかな
 山あひの原に時へつ炭折
 春菊たけてしまひしまゝの酒家訪はず
 上野村の山守より
 三月の山よりくるゝ大根かな

人事

涅槃會

丈草忌

彼岸

涅槃の日鳥をさびしく野の垣に
 入相の日のさしこもる涅槃かな
 涅槃落日拜みてまかる山をしく
 薄しめりに梅の過ゆく丈草忌
 柳見てゐるに彼岸の鐘がなる

風

一ところ風のすわりし空青く

出代

出代の老にあはれをかくるなり

雁風呂

出代のさびしき家と知らで来て

畑打

小家しどろ雁の供養の煙たて

野焼

窓のある舟かゝりゐつ畠うつ

苗代

女ゐる花のやどりの畑うちて

野を焼きてゐて鶯をきゝにけり

雨後の晝の苗代水を見わたせり

挿木

小石にてかこひ置きけるさし木つく

壓條

挿す中の一木青うになりゐたり

木の實植う

とり木してしたしき僧と別れ来る

松苗植う

木の實うゑて下りくる人をよしの山

菊植る

松苗うゝる人に言ひたき向ふ山

松苗をうゝるあとひくかすみかな

灯のともる日暮に菊を植ゑにけり

水よびて菊うゑおきし山べかな

乾餅

目刺

白酒

草餅

櫻餅

かきもちの晝たゞしろくかわく音
 目刺やく晝の柴火をつくるなり
 しろ酒を風うすき夜に賣りゐたり
 薄月夜しろ酒うりのよりそはれ
 白の端へ黄いな雀や草の餅
 櫻餅に箸そへつ薄ぐもりにて
 夜の淡ささくらもち屋をすぎゐたり

踏青

洲に近く風ほそうふき青をふむ
 人住まふほとり青きをふみにけり

摘草

つみ草をさそひあはせし微雨つゆの夜
 つみ草に髪結ふ母を待ちわたり
 摘草にほとり小家も出づるなり
 つみ草の手にて夕日をかざしたり

春日傘

春日傘たゝみてもどり庭の内

春の宿

春のやど籠に雀の飼はれたる
縦一木門ものふかき春の宿
野風ふき春の人家のありにけり

爐塞

爐を塞ぎひとり出し山べ畑青く

茶摘

積まで夕日のしきし茶つみ唄

桑摘

雨にぬれし山に日の濃く桑を摘む

春雑

上野村にて

山守の栖にもたれ春を看し

夏

時 候

初夏

夏淡き葉のひとひらに蜻蛉たれ

夏の朝

灘驛附近にて

顔のしまれるはたらしき人の夏の朝

涼し

灘驛を過ぎりて

我あとより汽車の來てつく朝涼に

梅雨

雀一羽啼かず地にぬれ梅雨の暮

敏馬神社にて

漁夫の綯ふ繩地に長く梅雨曇

脇の濱にて 二句

町にひとつのはたごとゝのひ梅雨曇
馬にふれじくと通る梅雨曇

暑さ

小亭

梟啼き去り暑き夜あくる鳩の聲

天文

夏の空

灘驛附近にて

花うりあふれくる夏空の明けはなれ

蒸風

風かほる木の中のむらすゝめかな

夏の雨

萩にゐる雀をぬらす夏の雨

露涼し

病中

露すゝしき朝の白粥にすわりたり

夏の月

湛ふる水に夏の夕月や臺所

地理

夏の山

夏の山の道に砂しく祭かな
町の日くれを行きしに小さく夏の山
夏の峯うつぶきて眠りふかくなり
夏山にふかくこもりてしまひけり
夏山にさし木島をこやすなり

清水

夏の野

夏の海

草刈りしあとのさびしき清水かな
つばくろの胸の張きる夏の野かな
山あひにすこし雲ゆき夏の野かな
乳しぼる家の垣穂の夏の海

動物

燕の子

水鷄

葭切

翡翠

鱧

金魚

朝日うすく箸とるに啼けり燕の子

そら豆の花くれて間なく水鷄川

雨をおくりし風あまりつゝ葭雀

翡翠のうつくしき日をもちにけり

夕かけて鱧荷をあぐる爽かさ

金魚屋ある新らしき町のへりをゆく

蚊

蚋

夏蟲

蟻

羽蟻

毛蟲

夏の蝶

蟬

螢

蚊のまとふ暮ぎはの木のコミあひて

葉のつきし桃もちつ蚋にさゝれけり

夏蟲のうるさゝに灯を覆ひける

蟻のゐる葉をつよ風がたゝみたり

羽蟻羽を日にきらめかしむらだつ日

草中の小生え木に見し毛蟲かな

かげり道の小石に夏のしゝみ蝶

朝山にさしかゝりたる蟬の聲

雨ばれのしづかなる夜の螢うり

植 物

若 葉

花 栽 ゑ て 若 葉 曇 り に ゐ た り け り

再 度 山 に て

米 ふ み に 電 話 か へ り つ 若 葉 山

對 少 年 某 子

母 の 恙 を 問 ひ つ る 若 葉 ぐ も り な り

新 樹

書 を も と め 披 き つ へ 行 く に 新 樹 あ り

若 竹

若 竹 の 穂 に ゐ る 鳥 は か す む な り

ち ら く と 山 家 煤 は く 今 年 竹

上野村の山守にそよのかさるゝに

二句

若 竹 を に ぎ り た き 日 の の び く に

若 竹 の 穂 に 薄 雲 の つ く 日 な ど

葉 櫻

葉 ざ く ら に 日 ざ へ ぬ う ち の 山 の 道

水 下 園

下 園 を 貝 ふ き て 出 で し 町 ひ ろ く

茂

水の如き真夜中にある茂りかな
親について燕かけりつ茂り空

布引の町にて

峽の茂りを下り來しにぼかど柳など

散松葉

米ふみが掃く水上のちり松葉

薔薇

さうび垣侍ち居る晝ちかく

繡線菊

とうすみとんぼしもつけの花うす日にて

卯の花

薄葉にお菓子いたゞく卯つ木寺

桐の花

内海の藍をほのかに桐の花

栗の花

古郷にて木匠の住む栗の花

合歡の花

ねぶたげに舟は貸しくれ合歡の花

冬青の花

空ねばうあるにあかりてもちの花

南天の花

南天花薄日雨にて今日もたつ

檜の花

上野村の山守を悼みて

檜さく曇り尊とき佛かな

百日紅

とまる前の雀のつきしさるすべり

牡丹

薄がすみ牡丹ふくらむ畑ひろく

百合

牡丹すぎし畑中の一本くもりたり

杜若

百合をあつむる手のくろく畑をよこざりつ

著莪の花

ふつくらと髪の結はれしかきつばた

蓮の花

瀑聲になりうつぶく水に著莪の花

河骨

蓮ひらく風のめをわたりゐて

澤鴻

河骨の上に青空のきまりたり

凌霄花

おもだかや夕浪に日の名残おく

凌霄花

はらくと子がいさごうつ凌霄花

綿の花

暮るゝ前の日のあまりたる綿の花

麻

麻刈りに出づるあしたの風の音

草いきれ

草いきれ山路にて日ののぼりゆく

青芒

西日にて行きつく家の草いきれ

青芒

来かゝりし雨の逃げゝり青すゝき

小連翹

小亭閑座

石菖

おとぎりさうの小生えに花を晝うすく
石菖おく窓をへだて、柳ある

苔の花

すゝしげに料理の出来て苔の花

藤の實

藤は實をたゝながうたらししめれる日

櫻の實

實櫻に鳥のまたゝきしきりなり

青梅

よしの山來しに細木に櫻の實
青梅やとかくして出て髪をつむ

杏

小さき津へつく人のありてあんずうる

林檎

海へゆく子の母がもつりんごかな

桑の實

桑の實の窓の子よ山羊の乳まちつ

青柚

雨雲の壓すに日のすき青柚かな

荔枝

亡き母を懷ふ

荔枝わる醫をしたしみし病後かな

筍
 老秋
 蠶豆
 莢豌豆
 蓼
 蓴
 夏大根
 新芋
 茄子の花

筍ならべうる水べりのむしろにて
 麥の秋遠山が曇りはてにけり
 麥間出る籠にそら豆のあふれたり
 暮れをまた出てつみにけり莢豌豆
 魚は荷に活きて蓼つむ朝の道
 蓴とる湖かざりなく碧りにて
 朝がほをまがきの色や夏大根
 新芋のわづかふかされすゞしき日
 暮るゝ道に町家少なく茄子の花

人事

青簾
 麻暖簾
 團扇
 打水
 納涼
 蟲干

母剃りて間を遠く住まひ青すだれ
 旅人這入る山風の筋の麻のれん
 露葉末團扇ふるゝにぬらしたり
 打水の木よりしたゝる宿につく
 あをざりの肌到手あてし庭すゞみ
 蟲干や晝かたむきてかきくもり

紗

麥の粉をひきてゐたりしひるまたつ

甘酒

嘗て旅に駿州清水町をすぎし折孤店

一碗の滋味今に忘れず 二句

水田青みに 湊薄雲 一夜酒

一夜酒雨かゝる旅のころもにて

鮓

蟲ごにてすゝむしの啼き鮓の宿

鳴焼

鳴焼の床几をたつと夜舟かな

水貝

水貝あてにのがれ來し亭の晝ひろく

心太

くさむらに子のあるをよびつところてん

氷室

氷室山下りくる櫃に桔梗かな

菜種刈

菜種殻もやしをり木のむかふにて

葉刈

刈りしあとの松葉をそむる夕日かな

葉刈せし木に風のそふ雨ありて

夜振

月影に夜ぶりの魚を見たりけり

秋

時
候

初
秋

初 秋 や 稻 田 雨 足 る 山 の 前

叔母の家にて幾夜留守もりて

残
暑

初 秋 や 閑 かな 窓 の 下 に ぬ る
藪 山 根 暑 さ 残 り て ゐ て 住 ま ぶ

冷やか

道ひやゝかにあかるく雀下りるたり
ひやゝかな雲をかすりし鳥の影
ひやゝかに一りんざしの花ひらく
ひやゝかに青菜畠のくもりかな
ひやゝかやわづかの水に蟲のすむ
ひやゝかにかくて山茶花ひらきくる
ひやゝかな野をもどり來て夜食かな

ある社前にて

鳩我とならびてありくひやゝにて

秋涼し

よそにふりし雨のあまりか秋すゝし

叔母の家の留守もる夜

秋すゝし小さき夜着を出されける
やゝ寒みかよわき人の臥床とふ
水にふるゝ枝に鳥啼きそゝろ寒
身にしむや柳の蟲の襟にゐて
寐つく子をはなれて母の肌寒き
夜寒

月あかき夜くもち橋にて

山家の灯見つむる橋の夜寒かな

すさまじ

夢中

秋 晴

すさまじく月さし入りし溪の奥

秋日和

水を汲む音かぎりなし秋晴る、

二百十日

狐におどろく鷄しづまりし秋日和

秋深し

二百十日の朝空を鳥二羽ゆるく
秋ふかき林に溪のありにけり

秋の暮

門出るに雨のこぼれて秋のくれ

ひとりゆく人を見知れる秋のくれ

秋の暮すゝきばかりの道かへる

木によれば風ひゞきるつ秋の暮

汲む水に一つ青葉や秋のくれ

秋のくれ栖を思ひ人かへる

天文

初風

墓洗ふ水のちりけり初あらし

ある家にて

秋の聲

初あらしの折ふしの白さるすべり
夜馬の走るをきけば秋の聲

秋の風

山畑に灰のまかる、秋の風
秋風や蟻のそひをる水たまり

秋の日

きら／＼と芭蕉玉巻く秋日かな

露

露の中坂下りてひろう暮れてゐる

秋の空

露の家にたゞ夕浪のよするなり
樹々しづかに立ちてうるほひ秋の空

露時雨

秋の空野に住むところ煙たつ
すい／＼と蟲水にふれ露しぐれ

待宵

待宵をよりてしづかや女ども

十六夜

待宵に野よりすゝきを入れにけり
いざよひや馬にてもどる山の原

後の月

山蔭に道をとりゆく後の月

地理

秋の峯

刈田

秋の峯に旅ののぞみのはるかなる
秋の峯に笠打敷きて伴もなく
負ひし子のすやくと寐る刈田道

動物

渡り鳥

山あひの日だまりにゐつ鳥わたる
籠になれし鳥のさびしく鳥わたる
鳥わたる對の火桶の價きく
わたり鳥晝したゝむる寺の下

秋小鳥
色鳥

山の出入のあたゝかく秋小鳥きく
色鳥や海を見そへし小松山

山雀

或草子をよみて

放ちやりし山雀來るつ兒の墓
鶺鴒笛をほそ風に吹きつゞけをり
林出て眼白わくるに夕酒屋
きくいたゞき庭木かゞやきゐたりけり
かし鳥や心せかるゝ山路にて
芭蕉さけて塀にかゝれり鶺鴒の聲
入海の入りこみて泊す鶺鴒の聲

鶺鴒

眼白

鶺鴒

櫃鳥

鶺鴒

つくくぼふし

ほしき日のやゝあたりつくくくぼふしなく

叔母の家に留守する事はべりて

ひろき間にてひとり食ふつくくくぼふしなく

蜻蛉

手ふるゝまでじつと夕顔の夕とんぼ
暮るゝ際のほん静かなる葉のとんぼ
とんぼゆく草のわづかにある道を

蟲

曉の窓より入りし蟲の聲

ある夜ひそり叔母の家にて

鈴 蟲

とまりに來てきゝてねむれり蟲の聲
すゝむしやしのびし寺の薄茶碗

松 蟲

懷某少年 三句

まつむしやわづらふ母の枕もど
まつむしや母は來る子を待ちこがれ
まつむしのなくや寢にゆく母の宿

馬追蟲

馬追なく障子のまへの村の道

秋の蚊

秋蚊なく鉢草の葉の染みかゝり

秋の蟬

梨一木蟬なきのこりゐたりけり

秋の蜂

嵐ふく前のつよみや秋の蜂

植 物

萩

あつき日のかげるをまちて萩の宿

叔母の家に居りて

留守をする日のつまりつゝ萩の花

芒

假寐さめし暮ぎはの壺の花すゝき
花すゝきさびしき日和つゝきたり
野に出でゝ日をくらしたり芒の穂

桔 梗

うつせみの殻透きとほる桔梗かな

小亭

白桔梗すゝきの鉢に咲きにけり

女郎花

松くろみてくるゝ道なるをみなへし

刈 萱

刈萱に雨幾すじのくもりかな

紫 菀

暮間来て蟬の奏でし紫菀かな

松葉すかせし夕ぐもりなる紫菀かな

野 菊

青空の見わたされゐて野菊つむ

水引の花

水引の花のかすかにそまりゆく

月見草

牛と馬別る、門の月見草

黄蜀葵

ほがらかな日を吸ひに出て黄蜀葵

鶏頭

坪の草みだる、中の鶏頭花

蘆の花

暮る、ばかりの土手の下なる芦の花

葉鶏頭

天王橋のほそりにて

草紅葉

かまつかや溪をき、出す町はづれ
はし近く火鉢出さる、草紅葉

葛紅葉

葛もみぢひそかな窓にうつろひし

末枯

うら枯や午より空の青かりし
うら枯や母をはなれず子のあそぶ

従弟の妻の野邊送りして

末枯の山の入相のうすしめり

桐一葉

傘さげてくらうに出るに一葉ちる

散柳

柳ちりしんと日のある薄草地

芙蓉

まかる寺うす墨の空の芙蓉見る

梨

梨の里ゆくに夕まの水明り

無花果

小亭にて

金柑

いちじゆくを午ましろなる皿におく

團栗

きんかんを母なる人のみやげかな

枳殼

さびしさや團栗のちる清水くむ

採藥翁來亭

南天の實

日闌干武庫山下りし荷の枳殼

枸杞の實

南天の實をつゝみしに鳥の影

枸杞あかし萱のまじりて風のある

穉

日南田のさびしさ見れば穉かな

黍

ひつち田へ雲はうす日をもらしたり

子規居士の墓を奠せしより

二十年を経たり

玉蜀黍

大龍寺道の秋ひろき黍が眼にありて

西瓜

なんばきび日のすみきりて風ゆする

日は水の青みにて照りつ西瓜畑

芋

芋ほりてもどる暮間の水の音

自然薯

微恙ありて窓下に臥す日

じねんじよ賣しんとしてしろき道をゆく

唐辛

草ひきしあとに夕日のとうがらし

間引菜

野にて買ふ間引菜を風のちらしたり

菱の實

東都某水亭懷舊

採るを見つゝ亭に座すにまづ菱出でゝ

秋茄子

暮れに来て子をおろしおき秋茄子

松露

松露とりて歸る子に逢ふ夕しみぬ

草の實

草の實の静かなる日をもちにけり

草の實にかゝるほどにて小雨やむ

草の實に鳥のつきゐて日くれかな

草の實のあかるき道にこぼれけり

蓮の實

蓮の實や籤のときざれて池のある

人事

施餓鬼

來る道に芒むらだち施餓鬼寺

踊

踊一夜里居の垣をはづれける

廻り灯笼

二夜ほどまはりどろのまはりけり

大文字

大文字を力にすゝむ草屋かな

秋の彼岸

ひやゝかに水の汲まるゝひがんな
彼岸にてにんじんすこしまきにけり

角力

秋さびし土俵の峯をとりくづし

駒迎

駒牽のよぎりし後の秋の里

秋の嗣

叔母の方に留守居して

秋の嗣宵よりひとり寐まりけり

夜學

夜學の子一間ゆたけきさまにして

後の雛

後の雛ひやゝかにして出されけり

新米

今年米日のゆきわたる門の内

柚味噌

味噌煮ゆる柚釜をきゝてひとり居り

甘干

甘干をしわたすを子等うちあふぐ

猿酒	猿酒のありかかたるに寺座敷
蟲送	稻むらに灯をあげてゆく蟲送
高揆	高はごに雲のゆきゝのしづかなり
鏡	山明りに雨そぼちるつ鏡をうつ
木賊刈	住む女木賊ならべし井戸の屋根
大根蒔	大根蒔日和さだまる山の中
糶	糶むしろ門をひろうにとりにけり
糶	糶干せし際をさゝんか暮合せ
椎柴	椎柴つみ山風ふかうきゝすまし

冬

時候

小春	門坪に小菊ののこる小春かな
短日	木蓮の葉の落きりし日短き
凍	凍に焚くしめり葉しろき煙たつ
冬の暮	せきれいを見失ひけり冬の暮

冬の夜

冬夜讀むかたはらにして湯の煮ゆる

冬至

水さしに水の乏しき冬夜なり

寒

南天の紅葉したゝる冬至かな

年の暮

寒が來る石ぶみの立つ草の戸に

牛を追ふ一つの道を年くるゝ

天文

風

山家ひそとたゞ風のふきくらし

北風

北風やのれんの前の高砂子

北風のふく木の中の柑子の木

冬の雨

冬の雨のあと薄日にて晝ひろく

霜

霜下りし水べりのほそき道くだる

冬の月

川すじは梅島にて冬の月

氷

草青きむろの口なる氷かな

雪

初雪にはどなう火消もどりけり
水口に雪すこしおきて晝になる
暮ぎはの柳に雪のつもりたる
雪もよひ藁しく鳥ばかりなり

吹雪

こもる里日に幾たびか吹雪きく
吹雪やみ花賣出たる午下り
薄みぞれ子の寐つきたるばかりなり
柴垣が閭をなしてをりみぞれふる

寒

地理

冬の山

冬の山小鳥仕立て、人住まふ
冬山のうるみにひやく鳥の聲

冬の水

ひとりゆく道にひそかに冬の水
今日も生きて此人に逢ふ冬の水
冬の水ところくの枯木の葉

冬の川

ひとりゆく冬川あそになり
にけり
冬川原屋根に葵の鉢を出す

水涸

水涸や宿とりおきて法をきく
つぎ橋の低うにかゝり水かるゝ
水涸るゝ村にかゝりて午餉とる

動物

さゝ啼

さゝ啼のとゝのうて来るに泊りたつ
菊の實をとりにかゝるにさゝ啼て

寒雀

水汲みて木の間行きゆく寒雀
寒すゝめ道の掃かれて晝ふかき
屋まはりのとゝのひをりてみそさゝい
枯芝に夕ばえのしてみそさゝい

鶺鴒

水鳥

掃苔にや、遠く寒むうきね鳥
こみあはで舟のかゝりしうきね鳥
水鳥やおそき俤にゆられつゝ

千鳥

小夜千鳥牡丹を見する燭とりて

鴨

夕浪に身をまかせゐる鴨にわかれ

鳴

里がまへ日裏になりて鴉を見し

牡蠣

牡蠣むくをじつとまぢゐつ暮の雲

植 物

山茶花

さゝんかに袖ふれてきく溪の音

山茶花や日暮を掃くに鳥の來て

山茶花に風うすき野を來てゐたり

茶の花

茶の花や河原へ寒く道のある

臘梅

臘梅やかすかなる日のうるみもつ

終の花

終句ふ神の厩の馬さびて

冬 椿

あづかりし子のなじみくる冬つばき
ぬかるみのかわかずなりし冬つばき

枇杷の花

枇杷の花落つききりし家のさま
山祇のふかきねむりや 榧の花

榧の花

冬 木

冬木たつ内庭をゆき泊りけり
仲のよき子に子守つき冬木の日
柿うりの出で、冬木にそうてゆく

紅葉かつちる

枯 木

つくろへる堀にかつちる紅葉かな
さびしさに出で、枯木によりにけり

落 葉

朝雲の日にひかりつゝ、落葉かな
掃きよせて落葉のあるを風さそふ
やがて落つる葉をなつかしむ日和かな

枯 柳

竿かくる細き柳のかれにけり
曇りかどあけたる窓の冬柳

冬 柳

残菊

のうれんの構への奥にのこる菊

寒菊

寒菊や子のイみて蔭つくる

水仙

言葉かけて寒菊のさく庭をゆく

水仙

水仙花雪の暮間のあかりかな

水仙

水仙や内湯を出で、日のくる、

石路の花

ひさぶくに都波木を訪うて

幽かなるものがたり暮れつばの花

草枯

草枯や畑の鋤かれて夕日しく

枯菊

枯のこる草にしぼしの小雨ふる

枯蘆

枯菊のみだれしまゝのうらゝかさ

枯蘆

芦枯る、池にそひをり山の道

冬の草

ゆあみせしゆるびに見たる冬の草

冬草のとうにぬれたる庭をはく

冬草にたばこ火消えてやがてたつ

葱

葱つくるところのもの、薄日もつ
ひともじの里小やしるの白木にて
藪出づる水のながれに葱洗ふ

冬菜

石河をわたりてみれば冬菜かな

大根

高荷にて寒う仕立て、大根つく

胡蘿蔔

朝雨のにんじんつきしばかりにて

人事

芭蕉忌

暮る、より寺のくゞりをしぐれの忌

蕪村忌

燭たて、白き襖や春星忌

炭

炭挽きの林あかるくすまひけり
炭がまにつめたき雨のかゝりけり
たそがれに炭のこぼる、疊かな

炭 團

火 鉢

埋 火

檜 柴

焚 火

冬の庭

花床に夜々のつひえのたごんかな
 火鉢に火おきてとゝのふ朝間かな
 埋火や雪もよひにて木の葉きく
 埋火に火を足しに來し日くれかな
 檜柴負ひ月淡き林ふりかへり
 焚火のがれてゐてコスモスの實をこぼす
 冬の庭の小さかりしが鳥の影
 冬の庭あかるく木立とゝのひし

蒲 團

冬帽子

足 袋

湯 婆

餅

峯の寺へ町なすやふとん干しわたし
 垣内の日まばゆくて子の冬帽子
 槌あてゝくるゝうれしく足袋をまつ
 うとゝととするにたんぼの扱はれ
 ひゞぐすりぬりて夜ふかき風をきく

風呂吹

湯豆腐

齋すを風呂吹きつ 峯の寺障子

某旗亭にて

湯豆腐の明り窓笹するゝ音

玉子酒

宵に來て心おきなき玉子酒

蕎麥湯

小庵

焼芋

丈草を思ひ入る夜のそば湯かな
芋やくをどうに來て子等待ちわたる

切干

三日月の寒むや切干入るゝなり

切干や鳥のかせぎのひし〜と

掛菜

草庵

莖漬

さゝやかに雀も知らぬ掛菜かな
しづかなる雨に莖菜をあげにけり

柴漬

柴漬をしてたえ〜に里のある

夜興引

夜興引て更けてもどりし月の下

鉢叩

鉢たゝきからびきたる月夜にて

野施行

野施行の灯ののぼりゆく高みかな

餅搗

うるみもつ明り空にてもちをつく
ちんづきの火起すきはに草青く
ちんづきを靄のつゝみし日くれかな
とゝのへるのし餅に障子あかりかな

煤 掃

す、掃や青菜畠をとりまはし

歳暮禮

歳暮もち山路たどるに日のあたる

節季候

節季候子のまつ家にもどりけり

門松營む

松立てゝことにしづかや假の御所

屠蘇散調す

小祇紗に屠蘇散匂ふうつりかな

榎搗栗賣

かや搗栗斗りこぼるゝ榎をしく

年一夜

わづかなる年の一夜をふりしみぬ

上野村遊稿

同再遊小稿

上野村遊稿

太正十年五月二十五日

家を出でよ

若葉麓夜のほのくに町家あく

青谷附近にて

道のつくられ若牛蒡なごうらさびし

青谷瞥見

常の日は町のさびしく夏燕

一つ幟が細町へたる、爽かさ

青谷の口を上野村へ折るゝ

木挽場をはづれに初夏の海ひろく
夏つばめ砂原に瓦そろひたり

上野村附近にて

原の崖を細瀧が落ち夏燕
妻とゆく夏めく淡きさびしみに
いてふならぶ道のすゞしく薄暑かな

いてふ若木の玉葉さゆらぎ真砂の日

上野村山園入口

茂り門_ノ楨に青實のつきるたり

山守を訪ひ葍島にて

朝ぐもりの雲うごきゐつ葍つむ
鶯耳に奥ある葍つみやます
妻の手に染めあへぬ葍つまれつゝ
葍つみあふるゝが上のこもりの木

孟宗 簾にて

あこがれ來し篁に入りき薄羽折
 袖をかゝげて撫するに竹の新たなる
 寂寞を孟宗の穂が走りけり
 孟宗 簾をわたる山風に老鶯が
 孟宗竹のふとときにしばし立ちすゞみ
 みかん島にて
 花みかんつみては嗅ぎつ妻は酔ふ

みどりへ花の白くひた／＼みかんかな
 花みかんの香に立ちのぼる山座敷

山園 所見

すゞしげに見しさくら葉の蟲の穴
 そら豆ちぎる櫻苗木のくもりにて
 杓子菜のわかきへりなる莢豌豆
 今朝すこし冷え／＼したれ瓜の苗
 くゞる木の葉に大いなる蟻を見つ

實生え木ののびるてすやし花鳥

上^ミの庵^ン寺にて

山^{ヤマ}中^{ナカ}に麥穂の青き庵^ンがまへ

茂山へ徑ある庭の若かへで

庵^ン寺よりの戻り

何かさびしくじやがいの花の葉を見る

屋根の苔のぬれに枝おく柿の花

桑の實を枝にてもつに日のこぼれ

山守の栖にて

ふすく^くと花葉の匂ふ夏座敷

苺すやし^しく海見つゝをればもり出さる

山守に別る

露の葉をおとしもらふに朝曇

花みかんの香の消えがてに道ほそく

歸路

風かほるつかねし花をうつぶけて

しゅみうりに逢ふ晝前の若葉山
 しゅみうり茂山へこす家の數
 夏はれぐかへりみもどる道をしく
 高み夏繪をかく人のひとりゐし
 町すじを見かけてひと木夏の松
 家に歸りて

初夏の花しばらく水にしをれるて

上野村後遊小稿

大正十年六月二十三日

摩耶山下にて

いんげん豆花もちつ朝日やはらかに
 小曇りの日のわたりたる黍の花

上野村山中

山の尾を染むるわづかの穂麥かな
 紫陽花や牛の追はるゝ山道に
 梅雨晴間そら豆くろく干しきりて

朝山のうるみに折りし花柘榴
折りかゝる花柘榴朝日ながれゐて

歸路

濃き芝にぢいと蟲なく夏がすみ
いてふ玉葉をつみてすゞしき日に見たり
單衣きそめてぬらす砂地の朝草に
つくばひ居るにおほばこのきはを牛通る
人行きゆかず車前草の花うすく染む

大正十一年十月十二日印刷
大正十一年十月十五日發行

非賣品

複製不許

著作
發行者

神戸市旗通三丁目十九番屋敷
安井知之

印刷者

神戸市三宮町一丁目三百二十番屋敷
辻仁三郎

印刷所

神戸市三宮町一丁目三百二十番屋敷
合資 明輝社

506
267

終